

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

幼き日の別離 詩の源泉

わずかに2行の詩だ。そらんじている人もあるだろう。雪ふりつむ、雪ふりつむ.....と繰り返せば、まぶたにほの白く、屋根の連なりが浮かぶ。幼い子らは眠りに落ち、すうすう小さな寝息が聞こえてくる。

ただ、解釈は案外難しい。太郎、次郎は兄弟なのか。であるなら、なぜ別々の屋根の下にいるのか。

ふたりの居場所について、「恐らくは舞鶴と大阪ぐらゐは離れているであろう」とみた人もいる。現代美術では指折りの画商で、2008年に亡くなった佐谷和彦さんである。

確かに作者の三好達治は、つかの間だが、舞鶴にいた。まだ小学校に上がらない頃、大阪の生家から舞鶴の家具商へ、養子に行くことになったのだ。

詩人の回想によれば、ある夏の夕暮れ、「来客のS—さん」を迎えた父は食卓にビール瓶を並べ、大人の話をしていた。次の間で姉妹や弟と遊んでいた長男の三好は不意に呼ばれ、「お前は、この小父さんのお家へ行くかい?」と聞かれた。

どういう意味なのか、しばし身を硬くした少年は、きっぱり「行く」と答えた。S—さんが以前に立ち寄った際に、カジカの籠を携えていて、かれんな姿が気に入っていたからだ。舞鶴へ向かう汽車の中でも、カジカはおうちにいる?と尋ねてみた。だが、舞鶴の家のどこにも小さな生き物は見あたらなかった。

結局は縁組に至らず、三好は兵庫の祖母に引き取られた。S—さんは別の家から養子を迎えた。その人の長男がほかでもない、先の佐谷さんである。

著書『画廊のしごと』に収録の一文によると、佐谷家では利発な三好をかわいがった。三好も旧制高校時代にはよく舞鶴に遊びにきた。

それでも幼い頃には、眠れない冬の一夜もあっただろう。その体験が「心の底に沈澱し、発酵し、詩の源泉と化した」と佐谷さんは記す。舞鶴説に賛同する人は少なくない。

舞鶴の地にも、遠く親兄弟が暮らす大阪にも雪はふりつむ。ただ、あまねく小さき者の上に、と言うべきかもしれない。寂しさも悲しみも包み込む雪、そして眠りは彼らにとって、限りない慰謝なのだから。

文・前田恭二

讀賣新聞 名言巡礼

2015年(平成27年)2月1日(日曜日)